CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事　―考古学編―

「発　掘　調　査」

VTR/31分45秒

□研究組織

―センター教官―

福井　康雄（教授・主査）

高橋　秀明（助教授）

芝崎　順司（助手）

宮本　友弘（助手）

―客員教官―

木下正史（東京学芸大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

永島正春（国立歴史民俗博物館教授）

―研究協力者―

安藤孝一（東京国立博物館学芸考古課長）

須藤　護（竜谷大学教授）

早川智明（埼玉県立博物館館長）

―埼玉県立博物館―

横川好富（埼玉県立さきたま資料館館長）

増田逸郎（埼玉県立さきたま資料館館長）

斎藤修平（埼玉県立さきたま資料館・主任学芸員）

宮　昌之（埼玉県立さきたま資料館学芸員）

岡本健一（埼玉県立さきたま資料館学芸員）

□　基本資料

題　　名	学部教育教材博物館学芸員の仕事―考古学編― 「発掘調査」
制　　作	メディア教育開発センター（大学共同利用機関）
制作協力	NHK エデュケーショナル
上映時間	31分45秒
原　　版	D―３・２分の１テープ
撮　　影	（第一回）平成７年９月27日（水）～28日（木） （第二回）平成７年11月９日（木）～10日（金） （第三回）平成７年11月13日（月） （第四回）平成７年12月５日（火）～６日（水） （第五回）平成８年１月17日（水）　※研究スタジオ
本　編　集	平成８年１月23日（火）～24日（水）※制作Ｖ２、Ｖ３
録　　音	平成８年３月６日（水）　※制作棟・RA スタジオ
完成試写	平成８年３月25日（月）

□　画面の時間経過

(1)　開始タイトル―制作・協力―　(12秒)　12秒

(2)　プロローグ　―埼玉古墳群の概要―　(1分28秒)　1分40秒

(3)　さきたま資料館の役割　(3分25秒)　5分5秒

(4)　将軍山古墳の発掘〈A〉　―その目的と実施計画―(5分55秒)　11分

(5)　将軍山古墳の発掘〈B〉　―作業の実際　(13分50秒)　24分50秒

(6)　将軍山古墳の発掘〈C〉　―その成果―　(4分45秒)　29分35秒

(7)　エピローグ　―発掘調査の意義―(1分21秒)　30分56秒

(8)　終了タイトル　(49秒)　31分45秒

音楽	効果	画　　面	時間	解　　説
		1　開始タイトル		(12秒)
		○制作・協力	(12秒)	
		2　プロローグ　―さきたま古墳群の概要―		(1分28秒)
	車音 鳥の声	○風土記の丘への道 ・田園風景に重ねて― T①W 「古墳群位置図」 (OL) ○古墳周辺の自然のたたずまい 愛宕山古墳付近―		N「埼玉県行田市の、大宮台地の北の端に広がる、さきたま風土記の丘。この一帯には5世紀末から7世紀初めにかけての9基の大型古墳が集中しており、我が国でも有数の古墳群を形成しています」
M1a ↓ ↓ ↓ M1b ↓		○古墳群 その一つ一つに重ねて― T②W 「二子山古墳」 T3W 「稲荷山古墳」 T4W 「丸墓山古墳」 ○古墳群全景 ○〈さきたま資料館〉入口― ○同・建物の全景 そこへ重ねて― T5W 「博物館学芸員の仕事（考古学系博物館編）発掘調査」	(1分40秒)	今回は、〈埼玉県立さきたま資料館〉によって、ここで行われる古墳の発掘調査のようすを追いながら、考古学系博物館学芸員の大切な仕事の一つである、発掘調査の実際の姿を見ていきたいと思います」
		3　さきたま資料館の役割		(3分25秒)
	室内音	○〈さきたま資料館〉玄関― ○同―内部		N「発掘が行われる現場に行く前に、これまで、さきたま古墳群では、発掘調査が、ど

			・見学者たち― ・陳列品 埴輪、鈴、鎧等々 ・館長に質問するレポーター T⑥W 「放送教育開発センター助教授 須藤　護」 ・答える館長 T⑦W 「埼玉県立さきたま資料館館長 横川好富」 ・人の埴輪 ・動物の埴輪 ・馬具 ・鉄剣のケースの前の二人 ・鉄剣のアップ T⑧W 「国宝・金錯銘鉄剣」 ・話し続ける二人 ○さきたま古墳群位置図 カメラが、将軍山の方向へ近づいていって―	（3分25秒）	のように進められてきたのかを知るために、古墳群に隣接して設置され、古墳からの出土品が展示されている〈さきたま資料館〉を訪ねることにしました。 古墳群の保存・整備のために行われてきた、これまでの発掘調査によって、どのようなことが分かっきたのでしょうか？」 須藤「この資料館が設立されてから、26年ほどになるということですが、その間、どういう成果が上がっておりますか？」 横川「出土品は、埴輪とか土器とかが多いわけでございますが、これは、古墳の整備を目的とした調査ですので、どうしても古墳の中心部というよりは、その周辺の調査を中心にやってきております。で、そんな関係で埴輪だとか土器類が多いわけでございますけれども、まあ、そういったものの中からも、この古墳群の性格なり、個々の特色なりが、かなり分かってきているということでございます。まあ、その結果、当館を取り巻く地域が、かつて、武蔵の国の中心地であるということが分かってきております」 須藤「これが、あの有名な稲荷山古墳から出土した鉄剣ですが、これは考古学の研究上、どんな意味をもっているんでしょう？」 横川「この鉄剣は、剣の峰に部分に、表と裏に、金象嵌で115の文字が刻まれているのが見つかった、発見されたわけですが、銘文の最初のところに、『辛亥年』という年号が刻まれております。また、その他に、『ヲワケの臣（乎獲居臣）』という、この剣を作ったというか、作らせた人の名前と、それから、8代にわたる系譜が刻まれております」 N「このように、さきたま古墳群では、日本の古代史の研究に貴重な資料をもたらした、稲荷山古墳をはじめとする、かずかずの発掘調査によって、多くの成果をあげてきました。今回の発掘が行われようとしているのは古墳の一角、稲荷山古墳と隣接して位置する将軍山古墳です」

		4	将軍山古墳の発掘(A)　―その目的と実施計画―		（5分55秒）
	現場音		○将軍山古墳―遠望 そこでは、ショベルカーによる掘削作業が行われている。 ・作業のようすを見ながら、話し合うレポーターと担当の学芸員 T⑨W 「学芸員　岡本健一（考古担当）」 ・断層のアップ T⑩W 「覆土― 関東ローム層」 ・スコップで掘る人 ・埴輪の破片アップ ○話し続ける二人― ○作業風景・全景		N「将軍山古墳の発掘現場では、ショベルカーによる表土を剝ぐ作業が行われているところでした」 須藤「今、ショベルカーが入って作業していますが、これは、どの段階になりますか、発掘作業の？」 岡本「これは、ですから初期の段階ですね」 須藤「初期の段階。で、今、掘っているところは、どういう部分になりますか？」 岡本「これは、ちょうど外堀の、こう入っている部分ですね。外堀の部分。この黒い土の部分が外堀の遺構ですね。そこを、今、ちょうどやってますね」 須藤「と、今掘っている段階までは、遺物は出てこない？」 岡本「そうですね。この下から遺物が出る」 須藤「で、今の段階で、気をつけなきゃいけないことっていうのは、どういうことですか？」 岡本「それは、もう、機械で遺構を傷めないということですね。掘り過ぎて傷めては、それで終わってしまいますから、掘り過ぎないということが一番です」 須藤「で、これをずっと掘っていきまして、その次の段階として、どういう作業が出てきますか？」 岡本「これが、来週になりまして、人の手で人力で掘り下げていく。機械で掘りますと埴輪とか全部ですね、なくなっちゃいますんで、人の手で掘りながら、埴輪も上げていくという作業になりますね」 須藤「ああいうところに、何か出てきてますけど、あれがもうすでに…」 岡本「あれが埴輪」 須藤「埴輪の破片が出てきている」 岡本「そうですね」 N「では、この度の発掘は、どんな目的をもち、どのような工程で進められようとして

					いるのでしょうか？　発掘現場を見た後、ふたたび、資料館を訪ねてみました」
			(WIPE) ○〈さきたま資料館〉 内部～ 作業室― 質問するレポーター 発掘資料を示しながら、質問に答える副館長 T⑪W 「副館長　増田逸朗」	(7分16秒)	須藤「…今、将軍山古墳の発掘現場を見せて戴いたのですが、この発掘に至るまでの経緯そのいきさつについて、お話し戴けますでしょうか？」 増田「はい。将軍山古墳は、既に、明治28年に、地元の人達によりまして発掘調査されておりまして、一部石室、あるいは、副葬品が分かっている古墳でございます。勿論、昭和43年に稲荷山古墳が調査されてからはですね。稲荷山古墳とともに、2基の、将軍山を含めた2基の古墳が、内容が分かっているということで、整備に、発掘調査に着手しました」
M2 ↓			○アルバムの写真 ・石室 T⑫W 「横穴式石室」 ・造出し T⑬W 「造出しの遺構」 T⑭W 「須恵器」 (OL) ○将軍山古墳想像図 (OL) ○年度別発掘進行状況 平成3年以後の進展状況が示される。 ○元の作業室 質問を続けるレポーター		N「本格的な発掘調査の結果、この古墳は、横穴式石室をもつ、全長90メートルの前方後円墳であることが分かりました。 また、その後円部には、造出しという広場があったことも分かってきました。 そして、その造出しから、須恵器という土器が出たことから、この古墳が作られた時期が、ほぼ、6世紀後半と特定されたのでした。 こうして、発掘調査の進展とともに、さまざまな事実が明らかとなり、その結果、この古墳が、さきたま古墳群の中の首長の墓だということが、次第に判明してきたのでした。 平成3年から始まった発掘調査は、古墳の主体部から、その周辺へと、次第に作業の範囲を広げてきました。そして、最終年度の本年、古墳を取り囲む外堀の部分を対象とすることになったのです」 須藤「それでは、今後の発掘調査は、どのような手順で進められていくのでしょうか？」 岡本「はい。まず、今、機械で掘っていまし

			T⑮W 「発掘の手順」		たけれども、機械で、まず、遺物の出ないところを全部機械で掘ってしまいます。それから、人の手を使いまして、まあ、大体２カ月くらいかかると思いますけれども、遺構とかですね、遺物を丁寧に出していきます。で、それを、全部、写真を撮ったりですね、図面をとったりして記録をとりまして、それからまた、砂をかけましてですね、遺構をちゃんと保護して、それから全部埋めもどします」
			○発掘調査の全体像	(11分)	N「こうして、発掘調査は、発掘段階から整理の段階を経て、報告書の作成に至るまで、周到な準備のもとに、数カ月もの間、時間をかけて行われます。では、実際の発掘は、どのようにして行われるのでしょうか？約一カ月の後、再び、発掘現場を訪ねることにしました」
		5	**将軍山古墳の発掘(B)** ―作業の実際―		(13分50秒)
	現場音		○発掘現在に向かうレポーターと担当学芸員 ○発掘現場・全景 ・基準杭のアップ ・ポールのアップ ・作業を進める人達 ・現場を見ながらの担当学芸員へのインタビュー		N「久しぶりに訪れた、将軍山古墳の発掘現場の周辺は、もうすっかり秋の気配に包まれていました。早速、外堀の部分を中心に作業を進めている現場を訪ねてみました。 発掘を行う時は、測量をします。対象地域に10メートル間隔で地区杭を設定し、その中に、２メートル間隔に区切ったポールを立て、古墳の位置を明確にします。そして、日々の発掘状況を記録しながら進めていきます。 作業に当たる人達は、約20人。いずれも近くの農家などから来た、熟練したメンバーで、発掘調査の現場担当である学芸員の指導のもとに仕事を進めていきます」 須藤「…荒堀りをしますと、遺物が出てきますね。と、遺物が出た次には、どういう作業になりますか？」 岡本「そうですね。遺物が出てきた場所を、ああいう風に残しまして、それで、また、周りを掘り下げていくわけですね。ですから、こういう風に山になってくるわけですね。これは、遺物を置いて、その周りを、

					こういう風な山に…」 須藤「こう、山を作るわけですね？」 岡本「こう置いていきますとね、はい」
			・山の出来る工程 （竹篦で掘る） （竹串をさす） （山を作る）		須藤「で、この山を作るというのは、どういう意味合いがあるんですか？」 岡本「それは、こういうものが、ここから、出てきたということが分かりますし、後で、図面を取るときに、場所と高さも重要になってきますね。どの辺の高さから出てきたっていうのが、やはり、結構重要なんで、それを併せて、図面に入れていくわけです」
			（出来上がった山）		須藤「そうすると、高さっていうのは、いわゆる、年代を判定するために必要なんですか？」 岡本「年代という感じではないんですけど、やはり、底のほうから出てきたやつですと、やっぱり、古墳が作られた当時から、この下に埋まっていたものということになりますし、上のほうからですと、後の時代から、入り込んできたというのが分るわけです」
			・話を続ける二人		須藤「すると、上にあるほうが新しい？」 岡本「まあ、年代が新しい場合もありますしまあ、崩れて埋まった年代が、結局、新しいわけです」 須藤「それで、ずっとまた、スコップでですね、剝いでいきましたら、一番出たこの面が、いわゆる底土？」 岡本「これは、もう底ですね。もう、これ以上は掘れない」 須藤「そうすると…」 岡本「堀の、一番底ですね」
			（OL） ・作業を続ける人達	（14分14秒）	N「発掘が進むに従って、数多くの遺物が、つぎつぎに掘り出されていきます。では、発掘されたこの遺物は、次に、どのように処理されていくでしょうか？」
			・インタビューの続き		須藤「で、今やっている作業は、どういう作業なんですか？」 岡本「はい。まあ、これから写真撮ったり、図面とったりするんですけども、そのためにきれいにしなきゃ、こう写らないわけですね。ですから、形がどういう感じで埋まっているかというのを、もう少し出していく」 須藤「きれいに出しているわけですか？」 岡本「はい」 須藤「それで、竹篦を使っているわけです

					ね？」 岡本「ええ、そうですね」
			・土を落とす工程 （竹箆を使う）		須藤「で、こう全体像を出していくわけですか？」 岡本「そういうことです」 須藤「全体像を、泥をとって、全体像を出して、で、この後、写真を撮ったり、図面をとったりして記録をしていく」 岡本「そういうことですね。はい」 須藤「あのう、主に、竹箆だけで？」 岡本「そうですね。後は、刷毛をつかったりもしますけど、取り敢えず、泥を落とすのは竹箆で…」 須藤「竹箆を使って泥を落とすと」 岡本「はい、はい」
			（刷毛を使う）		須藤「で、全体が出てきたら、刷毛できれいに？」 岡本「そうですね、刷毛を使うこともありますね。はい」
			（各種の道具）		須藤「だんだんあれですね。道具が、スコップから移植コテ、それから竹箆、刷毛という細かな物に、道具が変わっていくわけですね？」
			（WIPE） （きれになった遺物）	（15分 47秒）	N「さまざまな道具を使って、遺物を掘り出し、その全体像を整えた後、その記録の作業に入ります。
			・写真撮影 作業を進める担当の学芸員 T⑯W 「学芸員　宮　昌之（考古担当）」 （WIPE）		遺構や遺物の状況を記録するための写真撮影―発掘調査の場合、写真は重要な資料となります。
			・遺構の実測 （位置・形状の測定） （WIPE） （高さの測定） （WIPE）		また、併せて、実測図の作成も行われます。 遺物の位置や形を、丹念に記録する作業― 遺物のあった高さを記録する作業― こうして、データを記録した実測図と写真とがセットになって、一つの資料が完成することになります。
			・遺物取り出しの作業		発掘状況の記録が終わった後、遺物は、初めて、土の中から取り上げられます。 そして、発掘場所などを記したメモをつけて、その後の処理のために整理室へと運ば

			(WIPE)		れます」
			○〈さきたま資料館〉 作業室― 担当の学芸員に聞く インタビュア	(17分 30秒)	須藤「ええ、向こうで掘り上げてきて、そして、こちらにもってきますね。で、まず、最初にやる作業っていうのは、どういう作業になりますか？」 宮「はい。まず、遺物を現場から取り上げてきますと、そのまわりは土がついたまんまです。ですから―
			(水洗いの作業) T⑰W 「水洗い」	(17分 50秒)	あの、その土を水洗いで落とすわけですね。エアブラシやたわしなどを使って、表面、あるいは、断面の泥を落としていくわけなんです。ただ、その時にですね。表面を、あまり強くこすりますと、埴輪ですと刷毛目といいまして、工具の模様、工具の跡がついているんですけれども、それが、まあ取れてしまって、その方向なりで時代が、ある程度わかりますので、そういう模様を取らないようにと。後、断面はですね。断面と断面を合わせてつけますので、その断面に土が残っていますと、接合不都合になります。その辺は、注意して、水洗いは行います」
			(注記の作業) T⑱W 「注記」	(18分 30秒)	須藤「水洗いが終わってから、今度は？」 宮「注記という作業があります。それはですね。出てきた埴輪なり遺物をですね。何年度に、どこの古墳で、どの位置で掘ったというものを記録するだけですね。それはもう、先程も見ましたように、墨で、この場合は記録します」 須藤「注記する作業っていうのは、どういう目的？」 宮「そうですね。何年度に、どこの古墳で、最低限、それやりますね。で、出来れば、どの位置から、で、実測図という図面を取っていましたら、その何番目の埴輪っていうことを記録しておくわけですね。そうすると何番目と何番目が、図面をとっておれば、離れたところと離れたところのものがくっついたということが、後で、分かるわけですね」
			(接合の作業) T⑲W 「接合」 ・接合する破片の選択		須藤「それで、その後にですね。こう、沢山広げて、いろいろ組合わせをやっておりましたけれど、あの作業は、なんという作業ですか？」

				(19分23秒)	宮「あれは、接合といいまして、どことどこの遺物がくっつくかということの作業ですね。模様ですとか、大体の形からですね、付く場所を想定してつけていくわけです」 須藤「先程、話を伺いましたら、あれだけで丸一日かかるとか？」 宮「そうですね。パズルのような仕事ですので、一日で何個か付けば、それでもう…」 須藤「あ、一日に何個かという…」 宮「そうです。何個かという単位なんですね。ですから、一つの埴輪が完成するまでには、何日もかけて、接合するということになります」
			・埴輪の首の接着 T⑳W 「埴輪の種類 円筒埴輪 形象埴輪 家形埴輪 器材埴輪 人物・動物埴輪 (参考の埴輪の写真) (WIPE)	(20分11秒)	須藤「ええと、今、この段階まで作業がきておりますけど、これは、どういう意味合いをもった埴輪なんでしょうか？」 宮「ええ、古墳から出土する埴輪にはですね、いろいろありまして、筒型をした円筒埴輪ですとか、人物の形をした人物埴輪、動物の形をした動物埴輪、家型をした家型埴輪、いろいろな種類があるんですけれども、現在まあ、接合していますのは、人物埴輪の一種で盾を持った埴輪。 ええ、今、こちらに顔の部分があるんですけれども、この顔の、この頭ですね。顔から目の部分が、現在、ちょっと残っておりまして、ちょっと鼻が、この出土した資料の中には、ちょっと残念ながら見つかっていないんですけれども、この鼻とかですね口の部分にはですね。盾をこう構えた状態の埴輪なんですが、その盾のですね、片側の部分が、この面に当たるんです。で、そういうのは、まあ、復元するとどういう形になるかは、今までの他の古墳から出土した埴輪の例がありますので、このような写真が、もう既に、完成されたものがありますので、こういうものを見ながらですね、どの部分かどの位置だろうと、想定しながら復元していくわけです」
			(補修の作業) T21W 「石膏による補修」 T22W 「色付け」	(21分16秒)	N「接合した出土品の中の足りない部分を、石膏で補い、さらに、完全な形にと近づけていきます。 そして、復元された出土品には、色が塗られ、最後の仕上げが行われます。

			(OL) (仕上げの作業) (WIPE)		こうして、外堀の中から掘り出された、盾をもった人物埴輪は、何段階かの処理の工程を経て、元の姿へと復元されたのでした」
			○写真スタジオ 撮影する学芸員― (WIPE)	(22分 28秒)	N「復元された出土品の写真撮影―」
			○元の作業室 ・実測図を作る学芸員 (OL) ・完成した実測図 (刷毛目の部分) (データの部分) (WIPE)	(22分 45秒)	N「実測図の作成。正面から、あるいは、側面から出土品の輪郭が写し取られていきます」 N「こうして、輪郭を写し取った後、この実測図にはさらに― 刷毛目の細かい部分の特徴や― 土の種類、焼け具合、色調などのデータが記入され、完成します」
			・担当の学芸員に聞く インタビュアー (資料カード) (WIPE)	(23分 53秒) (13分 50秒)	須藤「先程から、写真を撮られたり、それから、実測図を作ったりされましたけれど、これの目的は何ですか？」 宮「はい、ええとですね。まあ、最終目的は報告書を作るということなんですけれども、まあ、写真だけでは分からない、あるいは、図面だけでは分からないというのは、相互で補って研究に役立てていくわけなんですけれども、最終的にはですね。それを、本にして市民のみなさまに提供、あるいは、研究者の人達のために提供するわけなんですけれども、館内の資料としては、このように、資料カードというものを作りまして、写真と図面と、その特徴をカードに記入することによって、まあ、後々、こういう探索の資料としても使うことが出来る」 須藤「そうすると、そういう作業を経て初めて、基礎資料として役に立つものになると」 宮「そうですね」 須藤「ということになるわけですね」
		6	**将軍山古墳の発掘〈C〉** ―その成果―		(4分45秒)
M3			○将軍山古墳 冬枯れの古墳群―		N「発掘が始まってから、凡そ三カ月後、三度、さきたま古墳群を訪ねてみました。十二月に入って、古墳の点在する〈さきたま

↓					風土記の丘〉の周辺は、すっかり冬景色に変わっていました。
			作業の現場―		発据現場での作業も、いよいよ終盤に入り、発掘のスタッフも、最後の追い込みにかかっていました。
			発掘の終わった遺跡―		では、これまでの発掘調査で、どのようなことが分かってきたのでしょうか？　発掘を担当した二人の学芸員に聞いてみました」
			○〈さきたま資料館〉作業室― インタビュアが、担当学芸員と話している。	(25分50秒)	須藤「ええ、９月から12月までですね。発掘調査を見せていただきまして、私自身も、大変勉強になったのですけども、今までの段階で、発掘によって得られた研究成果というものには、どういうものがありますか？」
			(発掘現場図面) T23W 「外堀の形状の確認」 T24W 「中堤の造出しの検出」	(26分7秒)	岡本「ええ、二重の堀があるというのは分かっていたんですけれども、今回、この辺を発掘しまして、外堀の形ですね、どういう大きさになっているのかというのがはっきりしました。後、中堤ですね、真ん中の土手の部分ですけど、そこに、造出しっていう広場みたいなものがあったというのが今回分かったんですが、それが、大きな成果ですね。はい…」 須藤「この造出しっていうのは、あれですか古墳の特徴的なものなんですか？」 岡本「そうですね。まあ、さきたま古墳群では、結構いろいろあるんですけれども、他の古墳では、こういうものはあまりない。見られない。で、恐らくは、ここで、お祭りといいますかですね、死者のためのお祭りを行った場所じゃないかと言われてるんで、そういうところの輪郭といいますか、がはっきりわかったていうのが、まあ、一つの成果ですね」
				(27分12秒)	須藤「次に、宮さんに伺いたいんですが…」 宮「はい」 須藤「出土品として、今回の発掘調査の中で得られた大きな成果、ちょっとお話ししていただければと思うんですが…」 宮「はい。今回の発掘調査ではですね。先程

			T25W 「盾もちの人物埴輪」 T26W 「戟」 T27W 「土師器」 T28「比企型」 （ビーズ玉）		の造出しという、言われる部分からですね盾もちの人物埴輪が出土しました。で、特に、この盾もちの人物埴輪は正面に、戟と呼ばれる武器を携えているということで、これが特徴ですね。で、こういう武器を携えた人物埴輪で、盾もちというのは、埼玉県内にも数例しかなく、全国的にも珍しい埴輪であります。 それとですね、お堀の中からなんですが、土師器が出土してます。で、この土師器はですね、埼玉県中央の比企地方、東松山周辺に多く見られる比企型といわれる杯の形をしておりまして、これが、行田のさきたま周辺では、ほとんど見つかっていないので非常に珍しいものです。当時の比企地方とのつながりが、ある程度あったということが窮えると思います」 須藤「それから、こういうのがありますね」 宮「これはですね。石室といわれる横穴式石室の部分の中から出土したものなんですけれども、これが、ガラス製のビーズ玉で、これはですね、今年度、床面、石棺を置く床面を調査しましたところ、193点新たに見つかりました。いわゆる、この腕輪ですとか、首飾りに使われていた…」 須藤「ああ、装飾品として使われていた…」 宮「ええ。装飾品ですね。小さいので、もう床の下のほうに埋まっていたということです」
				(28分50秒)	須藤「あのう、段々、発掘の事業も、終わり近づいているようですけれども、これから先、どういう作業になって行きますか？」 岡本「はい。ええと、現場のほうは、ほぼ、終わってきましたので、最後はですね、遺構の部分ですね。堀の部分に砂を敷きまして、遺構をそれで保護します。で、その上から、埋め戻します。それで、一回、発掘前の状態ですね。さら地の状態に、全部戻しちゃうわけですね。でまあ、来年度からまた、工事の方で、整備工事の方で、また、工事するんですけれども、それまで、埋め戻しておくと…」
			（WIPE）	(29分35秒)	

		7	**エピローグ　―発掘調査の意義―**	（1分21秒）
M4			○将軍山古墳 ・整理作業をしている係員― ・発掘現場―遠望― 発掘調査への所信を語り続ける担当学芸員。 ○夕日に映える埼玉古墳群 （OL）	（30分56秒） N「発掘が始まってから、凡そ三カ月、この後、埋め戻しの作業を行い、調査報告をまとめるまでに、さらに、数カ月を要するといいます。こうした、一連の作業を支える学芸員たちは、発掘調査の仕事を、どのようにとらえているのでしょうか？」 須藤「あのう、いわゆる考古学系博物館の学芸員としてですね。発掘調査をどういう風に考えておられるか。ちょっとお話しを伺いたいと思いまして」 岡本「まあ、考古学の場合はですね。出てきた、発掘調査で出土した遺物とかですね、遺構とかそういうものが、全て、学問の基礎のなってくるわけです。ですから、資料が蓄積されていくことによって、考古学という学問がどんどん、こう向上していくわけです。ですから、そういう発掘調査っていうのは、やっぱり、非常に基本になってくるわけですね。それと、まあ、後は、博物館の展示する資料ですね。そういうものが、増えていくという副次的な作用もあるわけですね。そういう点で、発掘調査が、非常に重要だっていうことなんですね」
		8	**終了タイトル**	（49秒）
			○夕景のスケッチ そこに重ねて― T29W 「学部教育教材作成研究会 安藤孝一（東京国立博物館） 亀井明徳（専修大学）	

↓				木下正史（東京学芸大学） 白石太一郎（国立歴史民俗博物館） 永島正春（国立歴史民俗博物館） 早川智明（埼玉県立博物館） 埼玉県さきたま資料館 横川好富（館長） 増田逸朗（副館長） 斎藤修平（学芸課長） 宮　昌之（学芸員） 岡本健一（学芸員） 放送教育開発センター 川島淳一 福井康雄 須藤　護 芝崎順司 製作協力　NHKエデュケーショナル 制作スタッフ 脚本・構成 福井康雄 撮影 黒柳　満　河崎邦人 金子昭三　首藤英憲 中山敬一 技術 安藤秀厚 織田寿一郎 鈴木一範 制作進行 落合智子　黒柳周一 学部教育教材 博物館学芸員の仕事 ―考古学編― 発掘調査　　終 （画面溶暗）	（31分45秒）	